

一九三〇年代の〈山岳文学論争〉を巡って

中 村 誠

はじめに

熊谷昭宏は、一九三〇年代の遭難を扱う小説を論じた際、当時の山岳雑誌には「山岳文学」のあり方を問う評論が多数発表されているとということを指摘し、一九三〇年代を山岳文学論の季節だと捉えた。その際熊谷はその議論の細部には触れなかつたが、当時の山岳文学論の特徴として、議論が抽象的であつたこと、小説、詩、短歌、俳句、紀行文といつたジャンルごとに問題を整理する方向に進まなかつたこと、特に小説に関する議論が見られなかつたことを挙げ、論争を概観した。^(註1)

本稿は、熊谷がその存在の事実を指摘した一九三〇年代の多様な山岳文学論に関して、ことに「山岳紀行文」のジャンルを中心にして、「山岳文学論争」の展開について分析・考察するものである。「山岳文学論争」とは〈山岳〉と〈文学〉それぞれの個別の問題ではなく、当然の如く、〈山岳〉の問題と〈文学〉の問題が交差する

場に発生した議論である。そして、それが一九三〇年代に起つたということは、とりもなおさず、〈山岳〉〈文学〉のいずれかの領域において、あるいは双方において、前時代的状況との間に軋みが生じたということを意味している。端的に言うならば、一九三〇年代の〈山岳文学論争〉は、〈山岳〉を巡る状況が近代アルピニズムの勃興期から近代アルピニズムの普及期へと変化する中で起つたものである。〈山岳〉を巡る状況が変わり、山岳紀行文に要求されるものも自ずと変化しなければならないときに、〈文学〉の側がそれに対応できないことからくる不満が〈山岳文学論争〉を引き起つしたということである。

以下では、まず、具体的な評論に触れつつ、その主張をいくつかのタイプに分類し、それと同時にそれらの議論の背景にある登山及び文芸に対する考え方を探ることから始めたい。山岳文学一般については論じられるもの

の、管見の限りではこの一九三〇年代の「山岳文学論争」に關するものは前記の熊谷の概括的な論述があるのみであるし、対象となる山岳文学に關する評論自体、あまり読まれたことのないものであると思われる所以で、やや煩雜にはなるが、多様な評論を紹介するといふことも一つの目的としながら、論を進めていきたい。

一 船田三郎・桑原武夫の「山岳紀行文」批判

宗教的登山とその関心に基づく山域を対象とせず、個人的好奇心から未知なる山域を登山するという、近代的な登山行為に絡んで発生した山岳文学の嚆矢となつたのは、小島烏水であつたと考へてよいだろう。烏水はウオルター・ウェストンやウイリアム・ガウランドの日本アルプス体験に感化され、自らも近代登山の担い手となり、その近代的な登山体験をもとに、明治中期までの漢文による紀行文を脱し、新たな山岳紀行文の書き手となつていつたのである。

その小島烏水をはじめとして、武田久吉・高頭仁兵衛ら七人が发起人となり、一九〇五（明治三八）年に山岳会（後の日本山岳会）が結成され、その翌年には機関誌である『山岳』が創刊された。田口二郎はこの雑誌について、「JAC創立の中心が烏水であることで、JAC

は早々から文芸家、芸術家、自然学者などを多く集め、初期の『山岳』は紀行のほか、多彩な人文知識の寄稿を得た」と述べている。登山行為と共に文化的な活動への傾きは大きかつたようである。永井聖剛は、その頃の『山岳』と『文学』との親和的状況を「山岳、文学に出会う」と呼び論じているが、それによれば、近代的アルピニズムが起こった二〇世紀初頭の山岳熱の高まりの氣運は、登山家のみならず文学者たちも共有し、登山界の側もそういう現象を歓迎し、そこに近代の山岳文学が成立していくたと言う。^(註3) 島崎藤村は烏水の勧誘により発足間もない山岳会に入会しているが、他にも、田山花袋・柳田国男・小山内薰・伊良子清白らの文学者が参加していく、構成員の名前を並べただけでも、今日の登山界との質的な相違を感じ取ることができる。山岳会発足当時は、『山岳』と『文学』とが互いに混じり合つた時代であったわけであり、そういう状況の中で、山岳会の機関誌である『山岳』は「烏水の『趣味の殿堂』」として、山岳文学の発表の場としても機能していったのである。

『山岳』が山岳文学発表の場であるという状況は、明治から大正・昭和へと移るまで継続し、『山岳』誌上に

は多くの山岳紀行文が寄稿されていったが、一九三〇年代に至ると、そこに掲載される山岳紀行文に対しての批判が起き始める。船田三郎は「日本山岳会々報『山岳』の批判」（『山と渓谷』一九三〇年七月）と題する論を寄せ、その頃の『山岳』誌上に掲載される山岳文学は「情緒登山文学」であり、その「ながたらしい刺喋な山岳の讃辞」は「聞き飽きた」と批判した。また、抒情詩や紀行文、記録は「いつも同じ繰言か同じ種板の焼直しの埠外を出でない」と、そのマンネリ化した記述を指摘した。このような批判が起る背景には、日本の山岳界を取り巻く状況が山岳会発足当時のそれとは大きく変化していたにもかかわらず、山岳紀行文が烏水の時代のそれと同じく、山岳景観の美と浪漫的な抒情の記述に終始していたということがある。

山岳会が発足した一〇世紀初頭の登山界は、「飛驒山脈をはじめ、赤石山脈、木曽山脈など、日本の屋根ともいすべき中部日本の山岳地帯の山々へ一斉に進出」するという活況の中についた。その頃は、まだ完全な地図も案内書もない時代であり、登山は「まさに探検の名にふさわしい」行為であり、山を志す若者たちにとって未踏の地の存在は、登頂欲と功名心を大いに刺激したであらうことは想像に難くない。志賀重昂が『日本風景

論』（一八九四年一〇月、政教社）で「登山の気風を興作すべし」と訴えてから十数年を経て、日本においても近代的登山の気風は勃興し、「日本アルプス」の山々は次々と登頂されていったのである。そして、「探検登山」は「一つの峰頭の往復あるいは横断登山」から縦走登山へと発展し、さらには「未知の領域を残している谷の開拓」へとすすみ、やがては、積雪期の初登攀が競われる時代へと移つていった。

しかし、一九三〇年代の登山を取り巻く状況は、一連の「探検登山」によって既に成果が達成された後であり、未踏の地(テラインコグタ)に対する「初」を競い合う時代ではなくなり、バリエーション・ルートの記録を争う時代へと移行していく。バリエーション時代と言ふと聞こえはいいが、「バリエーション」とは自己の登山と他者の登山との間でことさら細部の差異を見つけ出し、新たな登山価値を無理矢理发掘しようとするることであった。当事者である、その時代における先鋭的なクライマーたちには意味を持つ行為であつたとしても、未知なる土地に向かう「探検登山」に比べると、その記録が持つ重みは相対的に低いと言わざるを得ない。

船田がその頃の『山岳』に掲載される紀行文を「情緒登山文学」とし、「退屈極まる紀行文」だと批判するの

には、当時の登山を巡る状況が前時代のそれとは異なり、未知の領域を失つてしまつてゐたという背景があつたのである。一九三〇年代に山岳文学とはどうあるべきかという「山岳文学論争」とでも呼び得るような問題提起がなされるようになつたのも、「探検登山」の時代に比し登山行為 자체が既に血湧き肉躍るものではなくつてしまつたという状況の中で、山岳紀行文は何を如何に描くかという新たな問題に直面していだからである。

島田巽の、山が未知のものであつた時代には山の姿を伝えることでさえ意義のあつたことだが、山が近づき難いものではなくなつた今、同じ軌道を走つてはいけない（登山文学のために）『登山とスキー』（一九三三年九月）という主旨の主張も、登山界を取り巻く状況の変化に適応できていない山岳紀行文に対する批判である。

桑原武夫の「山岳紀行文について」（『山』一九三四年八月）も、「探検登山」時代の山岳紀行文にあるような「感激にみちた調子」で書かれる、旧態依然の紀行文に対する批判である。桑原らは具体例を示してはいないが、確かに「帰つて来た私達は凱旋將軍の如く皆に迎へられた。アルプス登山の名が一般に激しい魅力をもつてゐたからだ」（植草彦次郎「私の北アルプス」）『関西山小屋』（一九三四年七月）などと書かれると、ヨーロッパア

ルプスの難ルートに成功した一行が帰還したかのようでは、ちょっと大仰すぎる。これは夏の穗高岳登山の紀行文の一節なのである。また、「二十六日、果たして快晴に恵まれた。小舎からスキーを付けて行く。薬師岳の北尾根伝ひにずん／＼進んで行つた。高度を増すごとに大日岳から白馬岳、鹿島槍ヶ岳間の峯が迫る様な壯觀を現して來た」（島田武時「春の薬師岳より針の木越え」「山岳」一九三三年四月）という例に見るよう、その日の行動を逐一追つていくだけの散漫な文章も散見される。これでは桑原が「このごろ毎月の山の雑誌をうづめてゐる紀行文を読んで面白いと思ふことは滅多にない」と端的に述べるのも当然だろう。

それまでの山岳紀行文は、登山行為 자체が持つ価値に依存して成立することができたのであるが、そういう価値を失つてしまつた新時代にあって、山岳紀行文は困難な状況に立たされてしまつたのである。船田・島田・桑原らは、「探検登山」が過去のものとなり、これまで通りの山岳紀行文の方法が行き詰まつた時代に、新たな山岳文学の出現の必要性を説いたのである。

二 〈文学志向主義〉と〈山岳優先主義〉

前節に見たような船田三郎の山岳文学批判以降、山岳

文学を巡る議論が『山岳』『山と渓谷』『登山とスキー』『山』『山小屋』『ケルン』などの山岳雑誌において活発になり、ことに一九三三（昭和八）年・一九三四（昭和九）年の両年には、その種の文章の掲載が目立つて多くなつていった。特に多くの山岳文学論を書いたのが荒井道太郎・河合亭・春日俊吉である。この三人が山岳文学の将来に期待する根源的なものはほぼ共通していると考

えてよい。

河合亭「登山文学は登山家の手で」（『登山とスキー』一九三三年八月）は、「月月の山岳雑誌や大学の山岳部の報告等に、全く非道い紀行文があまりにたくさんのがばつてゐる」と嘆き、文学としての質を高めることを要求した。春日俊吉も「山岳文学へのア・プロテスト」

（『山と渓谷』一九三三年二月）で、当時の山の文章の洗練のなさ、表現の粗雑さを批判し、「文学的氣魄」の欠如を嘆いた。また、荒井道太郎も「山岳紀行文をより文学的ならしめることが、それを現在の貧困から救ひ出さしあたりの途」（『山岳紀行文の貧困その他』『ケルン』一九三四年二月）と述べ、文学へと傾斜して行くところに新時代の山岳文学が進むべき道を求めた。

これら三人の考えは、桑原武夫が登山事実の報告や案内記としての存在理由を無くした山岳紀行文が生き残る

途として、「文学としての紀行文となるより他はない」という見解を示したものと軌を一にするもので、このような文学としての質を高めるところに山岳文学の未来を託そうとする考え方は、当時の『山岳文学論争』においてある程度の共通理解になつていていたように思われる。仮にこのような主張を〈文学志向主義〉と呼ぶこととする。

このような考え方方が起つた背景には、草創期の登山が文学者・科学者などの一部の知的階層によってのみ行われ、山岳紀行文も文芸に馴染みのある者によつて担われていたのとは異なり、登山人口の拡大に伴い総体的に山岳紀行文の書き手の文筆力が下がつてしまつたということがあり、起つたべくして起つた議論であつた。

このような山岳紀行文に文芸を求める見方を押し進めなるならば、山岳文学は文学者の手に委ねるのが最も有効であるということにもなりかねないが、彼等は芥川龍之介の「檜ヶ岳紀行」（『改造』一九二〇年七月）のようものを求めていたわけではない。文学者が山岳に接近するのではなく、登山家からの文学への接近が志向されているのである。このことに関連して、一九三〇年代の山岳紀行文を巡る議論における、今一つの共通認識が浮かび上がつてくる。

〈文学志向主義〉とは一見対立するかのようにも思われるが、一九三〇年代の〈山岳文学論争〉の今一つの共通認識として、山岳文学の書き手はあくまでも登山家が担うべきで、登山行動の中身にも重きを置こうという考え方がある。ここには登山という行為を通してはじめて山岳は理解出来るという、登山を実践する登山家である自らの側に対する自負が潜在する。仮にこういう登山の実践行為を重んじる考えを「山岳優先主義」と名付けることとする。この発想は〈山岳文学論争〉が山岳紀行文というジャンルに対する言説に偏りがちで、詩・小説に関する関心が薄かつたという現象にもつながる。

河合亨は先に引用した論で、小説・劇・映画は一般的題材よりも山を題材とするものの方がつまらないとして登山文学におけるフィクションを退け、「登山文学は隨筆と旅行文を主とする文学」だと主張した。こういう隨筆・紀行文優先の考えは、実際の登山体験から来る現実性を優先させ、文学の前提に登山体験を置くという姿勢から来るものである。こうして河合は、「職業的文筆業の稼ぎ場になつて居ない山岳雑誌」に、登山家による登山文学の出現を期待したのである。

こういう〈山岳優先主義〉の志向は、「山岳文学の旺盛な制作なり、輝かしい樹立なりのイニシヤティヴ（率

先権）がマウンテンニアのむくつけき手のうちに確實に握り取られる」ことを「熱烈に希望する」（「山岳文学を想ふ（四）」「山小屋」一九三四年二月）と述べた荒井道太郎にも見られる。荒井はドイツ文学者で、自らが編集にも関わった『山小屋』では、一九三四年六月に「山岳文学号」を組み、新しい山岳文学創造の指針役を任じた人物である。荒井は『山小屋』の特集号の前に、四度にわたる「山岳文学を想ふ」と題した山岳文学論を展開し、その特集号へと至る土壤を作り上げ、「山岳文学は登山家の手で、そして、『山小屋』の山岳文学号は『山小屋』寄稿家の手で！」とそのスローガンを提示し、登山者たちからの寄稿をあおつた。

河合は「登山とスキ」において、荒井は「山小屋」においてといふように、それぞれ別の雑誌からの発信ではあつたが、ほぼ同時期に呼応するかのように、両者は登山家の手による山岳文学の樹立をスローガンに掲げたのである。

さて、この「山岳文学号」には、荒井の呼びかけに応じて読者から寄せられた紀行文や詩などの他に、山岳文学に関する論考も寄せられているが、島田巽「山岳文学の方向について」（『山小屋』一九三四年六月）も河合・荒井同様の〈山岳優先主義〉が志向されている。『山小

屋」特集号のスタンスが「山岳文学は登山家の手で」と

いうことと対応してか、島田は「山岳そのものの本体に喰入つた作品」を求める、それが出来る登山家に期待を寄せる姿勢を示した。文壇の大作家連の山岳紀行記がいかに文章の巧みさに優れていたとしても、それは山岳の真髓を伝えきれないこともあるという理屈から、登山行為を通過した「真摯な思索」と「実践」とを重要視するのである。

はじめに記した熊谷昭宏の指摘のように、一九三〇年代の〈山岳文学論争〉は、問題が未整理であることや内容が抽象的であるということから、議論は拡散し收拾がつかないようにも見えるが、それを総体において捉えたとき、述べてきたような〈文学志向主義〉と〈山岳優先主義〉と名付けた二つの考え方がある程度共通する志向として存在していることが確認出来た。

ここに、登山体験を重要視する〈山岳優先主義〉と芸的な素養や技量に道を求める〈文学志向主義〉とが、いかに融合すべきか、〈山岳〉をどのようにして〈文学〉へと接続し、どのような方法で表現すべきかという問題が発生するのである。

この問題に一定の答えを与えているのは桑原武夫である。前節で触れたように、桑原は「文学としての紀行文」となることを主張し、「文学としての紀行文」に文体の確立を求め、「文学志向主義」を提案したが、桑原には同時に〈山岳優先主義〉の志向も強く見られる。桑原が求める「文学としての紀行文」の文体とは、「登山家独特的の登り方」が「文学にあらはれたところを言ふ」というものである。つまり、桑原は登山家各人の個性的な登山スタイルが文学の文体に反映するという考えを示し、山岳文学は観念としての登山・山岳ではなく、あくまでも登山としての質を備えた行為を経た後に成立すべきものであるという考え方を示したのである。

また、桑原は山の文学を「遙かに山を眺めた文学」「山の中をあるいてゐる文学」「山に攀ぢる文学」の三通りに分け、その第三のものを切望したが、これはまさに〈山岳優先主義〉そのものである。三田幸夫・松方三郎のものを「山に攀ぢる文学」だと評価し、同時に「独特の登り方」がスタイルとなつている例として、加藤文太郎・坂本直行・今西錦司を挙げたが、彼等は皆登山家として一流の者たちばかりである。

独特な登山スタイルを独特の文学スタイルとして表現

三 新時代の〈山岳文学〉への模索

この問題に一定の答えを与えているのは桑原武夫である。前節で触れたように、桑原は「文学としての紀行文」となることを主張し、「文学としての紀行文」に文体の確立を求め、「文学志向主義」を提案したが、桑原には同時に〈山岳優先主義〉の志向も強く見られる。桑原が求める「文学としての紀行文」の文体とは、「登山家独特的の登り方」が「文学にあらはれたところを言ふ」というものである。つまり、桑原は登山家各人の個性的な登山スタイルが文学の文体に反映するという考え方を示し、山岳文学は観念としての登山・山岳ではなく、あくまでも登山としての質を備えた行為を経た後に成立すべきものであるという考え方を示したのである。

また、桑原は山の文学を「遙かに山を眺めた文学」「山の中をあるいてゐる文学」「山に攀ぢる文学」の三通りに分け、その第三のものを切望したが、これはまさに〈山岳優先主義〉そのものである。三田幸夫・松方三郎のものを「山に攀ぢる文学」だと評価し、同時に「独特の登り方」がスタイルとなつている例として、加藤文太郎・坂本直行・今西錦司を挙げたが、彼等は皆登山家として一流の者たちばかりである。

独特な登山スタイルを独特の文学スタイルとして表現

せよという主張は、まさに登山家でもあり文学者でもあつた桑原故に言い得たものであるが、ここで注意しておくべきことは、まず先に「山を攀ぢる」とや「独特の登り方」が求められたことである。桑原においても、山岳文学とは「文学」において「山岳」が語られるのではなく、あくまでも「山岳」から発してそれが「文学」として語られるべきだという論理が採用されているのである。こういう登山者によつてこそ「山岳文學」が作られるという論理は、山岳会草創期の鳥水らの時代のそれとは異質な発想であるが、これは登山行為が安易な浪漫的抒情として語られることを拒否する意識の現れであろう。

さて、こうして山岳文学成立のために、登山者には「山岳優先主義」と「文学志向主義」の理念の両立が求められ、個性的な登山の実践と文章表現力の修養が要請されたのであるが、いかなる文章表現をよしとするかという具体的な問題については、桑原は登山のスタイルが文体となるという抽象的な内容しか記してはいない。桑原以外の論者は、新しい山岳文学に対する具体的方策については、どう考えていたのであろうか。

このことに対してやや突つ込んだ提言をしているのが勝本清一郎「七月の上高地から（下）山の文学について」

（『読売新聞』一九三四年七月九日）である。勝本は、山岳文学の中で神秘・憧憬・孤高・畏敬といった文句が多用されるということなどから、「山岳は從来、浪漫派文学の舞台」だつたとし、自然主義以来都會中心の文学が主流を占めるようになつた時代にあって、山の文学は近代化の歩みから取り残されてしまつたという認識を示した。そして、前年に立てられた高橋貞太郎設計による上高地帝国ホテルに対しても、「かう云ふ浪漫主義的な様式でないと山に対してお約束通りでないと思つてゐるらしい」と、その設計が時代錯誤であることを揶揄した。そうして、登山文学は旧派の浪漫主義にすがることを止めて合理化されねばならないと説き、山岳をリアルisticallyに捉える姿勢を提唱した。

春日俊吉も文学的な質を上げる方法論として、勝本の意見に同調している。春日は「山岳文学を育む温床」（ケルン）一九三四年九月）の中で、勝本の考えに依拠し、「問題とするに足る山岳文学が存在しなかつた理由・責任こそ、従来の山岳文学者が、大方一時代前の、浪漫派の夢を抱いてゐた結果でありはしなかつたか」と述べ、「新らしき、リアリズムの旗手のもとに」という言葉の中にこそ「日本の山岳文学をたゞしく育くむ、唯一の「温床」」があると決論づけた。

「山岳文学論争」は、従来の山岳紀行文への物足りなさを批判することから出発し、マンネリ化した山岳紀行文の文学としての質を高めることでそれを乗り越えようという方向へと進んでいった。そして、「ここに至つて、文学としての質をいかに高めるか」という具体的な方法論の提示へと進んだのである。そうして勝本や春日などは、烏水以降一九三〇年代まで続く浪漫主義的表現を脱却し、リアリズムの手法を採用するということにその方途を求めたのである。

しかし、このようにリアリズムが希求されるということは、独り山岳文学のみの問題ではなく、これは当時の文芸思潮とも接続する課題でもあつたはずである。文芸復興期とされる昭和一〇年前後の文学は、しきりにリアリズムが喧伝されるという状況にあつたが、「即物的な登山報告」「科学的な登山報告^(註)」を要求した勝本の論も、一文芸思潮としての社会主義的リアリズム論が山岳文学にまで敷衍されたものであろう。

さて、このリアリズムを巡つては当時の山岳文学と一般的な文学との間で二点の相似が存在すると考える。松本和也は昭和一〇年前後の文学状況の中で議論されるリアリズム論に関して、「リアリズム」という標語は、およそ同一の語とは思えないほど意味内容の広がりをもつて「いる」と述べたが、山岳文学上で唱えられるリアリズムも全く同様で、用語のみは共通に語られるものの各人のその内実は今一つはつきりしないし、多様でもあつた。^(註)また、松本は一連の批評言説を分析し、「リアリズムとは従来の文学（觀）が行き詰まつた昭和十年前後において浮上してきた、他ならぬ今における文学的課題の、曖昧で柔軟性に富む隱喻である」との認識を示したが、山岳文学上で語られるリアリズムはこの点においてもよく似た状況にあつた。文芸上のリアリズムが文学（觀）の行き詰まりから新たな文学的課題として持ち上がりたとするならば、山岳文学も「探検登山」時代の登山（觀）に限界が生じ、新たな登山（觀）を構築しなければならないという、登山の新時代に向けて発生した課題であつたからである。

文芸復興が叫ばれ芥川賞設立で盛り上がつた昭和一〇年前後の文学界は、言わば新旧の文学（者）の過渡期であつたということが言えようが、それはまた登山界においても同様な時期を迎えていたのである。山岳の領域における一九三〇年代とは、登山觀・方法論共に旧来型のものは異なる新しいスタイルが期待され、そういう登山から生まれる新しい登山文学が切望されるという一つの過渡期に当たつていたのである。山岳文学に批判が集

まり、リアリズムをはじめとする新たな方法論が求められるようになつたのも、山岳界が新たな時代へと移り変わらうとする胎動であつたのである。

しかし、仮に評者たちがリアリズムの方法論を明瞭に提示し、山岳文学を方向付けたとしても、旧来型の浪漫主義的な記述からの脱却には根源的な困難がつきまとつてていることも事実である。近代の登山がそもそも山岳の美と高さに対する「抽象的な憧憬と欲望」^(注1)を始発し、崇高^(サブリーム)というロマン主義の理念をその精神の拠り所にして始まつた^(注2)ということからするならば、文芸的な表現の問題である以前に、近代の登山観そのものを改変することが迫られることになりかねないからである。桑原武夫が「探検登山」以降の登山に対して、登山家各人の「独特的の登り方」^(注3)を要求したのもまさにこのことと関係するのであり、新しい山岳文学を成立させる前提として、登山者それぞれが浪漫主義に依拠しない新しい登山観を樹立することが要求されたのである。

四 〈山岳文学論争〉の帰結

これらの〈山岳文学論争〉は、はたしてその後の山岳文学創作の実践にどのような影響を与えたのだろうか。このことについて近藤信行は、「昭和十年前後のこと、ある山の雑誌が「山岳文学は登山家の手で」というスローガンを掲げ、文学作品の制作をよびかけたが、すぐれた文章の書き手があらわれなければ、いかんともなし」としての記録的な文学を要求したことが影響すると思われる。机上で構想される観念としての登山ではなく、各人それぞれの実地での実体験を元に記述する姿勢が求められたのは、同時代の綴り方運動が、児童の純真さを普遍的で自明な存在だとするような童心主義から脱却し、自らが立脚する個別的な場と具体的な体験を元に生活体験を記述させようとしたのと軌を一にする現象でもあつた。リアリズムが求められたことと同時にこれも同時代の文化現象と接するもので、登山行為を如何に表現するかという山岳界内部の課題は、実は広範な文化的背景を持つ事象でもあつたのである。これらの観点を重視し〈山岳文学論争〉にアプローチするならば、また異なる問題設定が出てこようが、このことは今後の課題としたい。

さて、〈山岳文学論争〉は山岳紀行文に関する論がほとんどで、詩・小説への関心を欠いていたという点に関して、少し補足しておきたい。これは近代の山岳文学がもともと近世紀行文の系譜上に発展してきたということと、登山行為の実践を重んじる〈山岳優先主義〉が肉声

がたかつた」と評した。これは「山岳優先主義」と「文

見ることが出来る。

学志向主義の二つの志向がうまく交わることが出来なかつたということであり、とりわけ登山者の「文学」的素養の欠如の指摘であるが、納得いく山岳文学が制作できなかつたのには、根源的な理由がある。〈山岳文学〉が「文学」に回収されることなく「山岳」と冠する必然性を保ち、独自のジャンルたるためには、まず登山行為の内容自体が問われねばならないが、その登山行為そのものの中に文学を成立させるモチーフを見付け得なかつたということである。即ち、桑原が求めたような各人各様の個性ある登山観が確立できたのは一部にとどまり、多くの登山者は近代的登山勃興期を支えた山岳への浪漫的憧憬ではない、新たな動機を発見することが出来なかつたということである。

しかし、「山岳文学論争」を契機として新たな読者層からの新たな書き手を発掘するということには至らなかつたものの、独自の登山観を形成しその行為を通して、今日でも読み得る普遍的な価値を持つ作品を残した登山者も幾人かいる。山岳雑誌の中で「山岳文学」が語られるという状況は、自ずとそれらの書き手にも影響を与えただらうことを考えると、「山岳文学論争」はあながち無駄であつたのではなく、一定の意味を果たしたと

は、深田久弥の最初の山の本となる『わが山山』（一九三四年一二月、改造社）、北海道・千島の登山を対象に先駆的な登山を行つた伊藤秀五郎による『北の山』（一九三五年一月、梓書房）、槍ヶ岳・北鎌尾根の遭難から五年後に刊行された加藤文太郎の『単独行』（一九四一年八月、加藤文太郎遺稿集刊行会）などを挙げることができよう。

深田のそれは山を真に愛する心情が如実に伝わるもので、歴史・文学などにも触れながら筆を進めるというその手法は、後の『日本百名山』（一九六四年七月、新潮社）への経路を既に示している。〈山岳文学論争〉では山岳文学の「文学」としての生き残りが一つの策として提案されたが、それにいち早く応えたのが『わが山山』としてまとめられたこの一連の作品であつたと思われる。北の山を対象に開拓的な登山を行つた伊藤は、同時に「静観的登山」^(注15)の提唱者であり、その独自の登山態度がこの一書にはよく表現されている。伊藤は「山岳文学論争」の渦中にもいた人物であるが、この一書はそれに対する実作での答えということになる。加藤のものは山岳雑誌に発表されていたものを中心に遺稿としてまとめ

られたものであるが、単独行という登山の独自性が同時に文筆の個性にも響いた逸品である。

こうしてみると、これら二者にはそれぞれがしつかりした独自の登山観によつて登山行為がなされていることが分かる。文学として堪え得る山岳文学を求めた桑原武夫は、その前提として登山家それの「独特の登り方」が必要であることを説いたが、ここに挙げた三人の山岳文学こそは、そういう登山を経て成立したものであつたと考えてよい。

おわりに

一九三〇年代の「山岳文学論争」は、登山をどう「文學」表現するかという問題以前に、まず前提としてどのような登山がなされるのかという、「山岳」行為に重点を置いて論じられるところにその特色はあつた。一九三〇年代の「山岳文学」の問題とは、翻つてその時代における登山界そのものの問題であり、「探検登山」の時代からバリエーション時代へと移行する登山界の状況の中で、新たな登山觀をどう形成すべきかという問題と絡んで発生したものである。

そういう中で、前節に挙げたような登山家たちによつて一定の成果が達成されたのは、当時の登山がまだそれ

なりに文学のモチーフになり得る余地を残していたということである。「探検登山」は勿論のこと、登山にパリエーションを求めることがえ困難になつた今日、「山岳文学」を維持することははたして可能なのだろうか。これだけ登山が大衆化し日常のものとなつたことを考へると、各人が独自の登山観の元に個性豊かな登山を実践するというのは極めて困難なことである。既にその兆候は出ているが、今日山岳を対象に書こうとするならば、よほど特異なテーマ設定をするか、文芸としての価値を高めていくかといふ、二つの道しかないと^(注15)。かつて「異界」であった山が日常の場と化しつつある今、今後「山岳文学」はファイクションとしての「文學」に回収されれる運命をたどるしかないのかも知れない。

今後の山岳文学の暗い展望に比し、一九三〇年代とは、まだ「文學」と拮抗することのできる「登山」が存在し、「山岳文学」を語ることができた幸福な時代であつたとせねばならないだろう。

注

(1) 熊谷昭宏「死に至るスポーツを語る——一九三〇年代

の山岳雑誌のなかの「文學」とその周辺」(疋田雅昭・

日高佳紀・日比嘉高編著『スポーツする文學』一九二〇

一三〇年代の文化詩学』二〇〇九年六月、青弓社) 二一〇頁。

(9) 松本和也「昭和十年前後の『リアリズム』をめぐつて——饒舌体・行動主義・報告文学——」(『昭和文学

(2) 田口一郎『東西登山史考』(一九九五年五月、岩波書)

店)四二頁。

(3) 永井聖剛「山岳、文学に出会う——創刊期の雑誌『山岳』と山岳紀行文、あるいは小島鳥水——」(早稲田研究と実践)二〇〇〇年三月)二九頁。

近藤信行『小島鳥水 山の風流使者伝』（一九七八年）
月、創文社）二五一頁。

(5) 登山史に關する概観的な記述、及びそれに際する引用は山崎安治『日本登山史』(一九六九年六月、白水社)に拠つた。

(6) 以降の桑原の引用はこれに拠る。

(7) 渡辺漸も「山岳紀行文の功罪」(『山』一九三四年八月)

の中で「山があるが儘に見る習慣をつけ」、「言葉に再

現する場合は、努めて現実的であらうとする事」が必

要であると説き、勝本・春日と同様にリアリズム的な

描写の必要を説いた。また、島田翼もそれらに近い立

場であると思われる「山岳文学の方向は？」、「山屋」一九三四年五月)。

(8) 勝本清一郎「山と芸術」(『ケル』) 一九三四年九月

一五〇

田立秋「日本の」の小説』『山小屋』一九三四年六月、辻莊一「山岳文学」放談』(ケルン)一九三五

(11) 松本、前掲論文、一四頁。

(12) 坪井秀人「山とシネマと

スクリーンの中の異界——」(『感覺の近代』二〇〇六)

(13) 本文及び注で言及した以外にも、細野重雄「山岳紀行」(一九三三三五)、丁

文に放ける「傾向」（『山と渓谷』一九）

年一月)など、多くの山岳文学を巡る評論・隨想が書かれている。

(14) 近藤信行「山の文章について」(徳久球雄・塙本珪一・

湯浅道男・雁部貞夫監修「新岳人講座8 山と文学」
一九八〇年二月、東京新聞出版局) 一三頁。

(15) 「静観的登山」は時として低山徘徊派のように誤解されることがあるが、伊藤は『北の山』において「静観的」というのは、山登りにおける激しい身体的な行動と、危険を含んだ肉体的な緊張感のみを享樂することに止まらずして、そのような行為をも含めて、より豊かな心を以て自然を観照しようとする態度である」(「静観的とは」と定義付けている。引用は『北の山』(中公文庫、一九八〇年三月) 一三六頁。

(16) 前者の例として角幡唯介『空白の五マイル チベット、世界最大のツアンポー峠谷に挑む』(二〇一〇年一一月、集英社)、後者の例として南木佳士『山行記』(二〇一一年四月、山と渓谷社)を挙げておく。

(なかむら・まこと／愛知県立春日井南高等学校)